

科学技術文明論の視角と方法論を求めて —鳥葬と臓器移植、そして国家—

米本昌平

三菱化成生命科学研究所

先進国型社会は、人類史上異様な文明段階に入ってきている。この異様さを視覚化するための一法は、ヒマラヤ奥地の生活と先進国の生活とを同時に視野に入れ考察することである。チベット奥地での死の意味と現代医療との衝突、奥地の水系に散乱するプラスチック。これらの事実は、現代諸技術の背後には、その使用に見合った社会体制が付随していることを主張する。現代社会を禁欲的な消費社会に変換しなければならないとすれば、国が国民の生活様式を定めこれが守られているブータンは、人類の未来にとって貴重な実験国家であることになる。

1 動機

1990年の6月の初旬、チベットからヒマラヤを越え、カトマンズの小さなホテルにたどり着くと、そこには日本からの一通の手紙が待っていた。その中には、私が日本政府の脳死臨調(臨時脳死及び臓器移植調査会)の参与に任命されることになったことを伝える、新聞の切り抜きが入っていた。寝耳に水とはこういうことをいうのだろう。

脳死臨調とは、超党派の国会議員の手によって成立した法律に従って90年春に発足した首相の諮問機関で、2年の時限で、脳死および臓器移植の施策に関する重要事項について首相に答申を出すことになっていた。脳死臨調は発足後まもなく、15名の各界代表の委員に加えて、議決権はないが専門的立場から審議に参加する参与を5名任命することに決めた。しかし、私はチベットにいたため連絡がとれず、結局ヒマラヤから帰国後、私一人改めて任命されることになった。

先端医療の社会的倫理的問題や地球温暖化論の科学史的分析を扱ってきた研究者が、ある日突然、チベットに行きたい、などと言いつせば、誰だって目を丸くする。私の職場でもそうだった。しかし、とにかくにも私はシシャパンマ学術医学登

山隊に参加したかった。それは、山に登りたいというのとはかなり違った衝動だった。白状するが、私は登山行動の間中、自分はここにいるべき人間ではないのではないか、という自責の念に何度も苛まれた。ならばなぜ、ヒマラヤ行きを切望したのか。その理由を無理にでも言葉に表わせば、異様な段階に入り込んだ現代科学技術文明とは正反対の極に、いますぐにでも身を置いてみたかったからである。

まず間違いなく、いまの日本は人類史上初めての異様な文明段階に入り込んできている。現代日本の、とりわけ都市型の生活が何ものであるかは、まだ明確には概念化されていないし、そもそもそのような問題意識すら希薄である。たぶんこの作業は、何十年か先に歴史家といわれる人間が、いまのわれわれが思いもよらぬ角度から、力技で抽出し概念化してしまう類のものなのであろう。しかし、渦中の本人が自身を客体視するのは原理的に不可能であることはわかっているにしても、その予兆が感じとれる以上、その当人もがいてみるべきだと思う。そしてそのためのかすかな可能性の一つは、心を空しゅうして考えうる限り両極端の状況に、身を置いてみることである。それ

は文字通りの賭けであり、うまくいく保証なぞ何もない。

2 チベットからみる先端医療

しかし、それは鮮烈な体験であった。チベット最深部のラチュー村で、激しい砂嵐の中、われわれは臨時の診療所をたたもうとしていた。その時、うわさを聞きつけて、遠くの村から村人が村長を荷馬車に載せてやってきた。一見して、周囲にはただならぬ雰囲気が漂っている。村長はもう死ぬのだが、せめて最期だけは最新の日本の医師の手で見取ってやってほしい、というのである。村人全員は、まもなく村長は死ぬものと確信している。いつごろ死ぬのか、と問い質しもした。あるいは、鳥葬の準備をするのに時間がかかるのかも知らない。

しかし、わが隊の医師の診断は、「軽い脳梗塞によるマヒと軽度の肺炎」であった。てきぱきと点滴をし、村長は死なないのだと説明して回った。この時、村人の中を走った異様な戸惑いの表情を、私は決して忘れない。ええっ！という感じである。日本のような医療施設が一切ないチベット奥地では、人は体が動かなくなり自力で栄養がとれなくなれば、脱水症状に陥り体力が消耗し死んでゆく。

本人も死を覚悟し、周りの人間もそれぞれにお別れを述べ、心を固めてゆく。それはそれで、穏やかな死なのである。

わが同僚医師は、この事態を前になんの躊躇もなく、日本にいるのと同じ感覚で点滴を施し、救命治療を行なった。これはこれで立派なことである。少し晴れがましくもあった。だが、垢だらけの足の甲を消毒液で何度もこすって点滴のための静脈を浮かび上がらせるのを手伝いながら、私の心の片隅には言うに言われぬわだかまりがあった。この違和は、いまならはっきり言葉にすることができる。それは、この行為によって、われわれは意識するにしろしていないにしろ、チベット奥地で不動のものとして共有され続けてきた、死ゆくプロセスの文脈を、いま破壊しているのだ、ということである。

科学技術の浸透は、ある種必然である。これは私も認める。しかし、その浸透に底なしの善意から手をかすことと、その浸透を個々の文化が全体的文脈の中で咀嚼してゆくことの重要性を意識していることとの間には、大きな開きがある。これは、たとえ救命という至上目的があったとしても、である。この体験は、日本の医師のほとんどが、科学技術の普遍妥当性に一切の疑念を差し挟まな



チベット、ラチュー村での調査隊の診療風景

い確信を共有した精神的教育的集団であることを思いがけなくも再確認した、私の驚きでもあった。その単純素朴さは、ある意味で、チベット人の素朴さと相共通するところすらある。先進国型の医療システムが、科学技術の適用のための効率的で、場合によっては攻撃的ですらある体系であるという確信は、その後、現代医療を考える時、片時も頭から離れたことはない。

ところで日本のような先進国型の社会では、慢性疾患対策が医療の中心課題となり、その結果、急性疾患の時代にはあまり意識されなかった、生死の文化的意味と医療技術の適用との調節が重要問題となる局面がでてくる。臓器移植問題はその典型であるが、日本で臓器移植が進まないのは、欧米は心身二元論で魂が肉体から離れば遺体はモノと同じだが、日本は東洋的な心身一元論であるため遺体に対してそういう割り切った考え方ができないからだ、という俗説がなお流布している。しかし、わが国で臓器移植が進まない本当の理由は、本来、メディカル・プロフェッション(医療職能集団)として律しきべき問題を、日本のそれがプロフェッションとしての機能を整えておらず、その責任を果たせなかったからに過ぎない。しかし一方で、もし他先進国での脳死・臓器移植の社会受容が、やはり近代西欧科学の延長線上にある一文化的現象でしかないことをラジカルに示すよい方法があるとすれば、それは、鳥葬が主流である社会が臓器移植技術と出会ったらどうなるか、を考えてみることはないか。

かなり前から、私は、何となくこう思っていた。そんなわけで、チベット第二の町シガツェにたどりついてまもなく、給仕をしてきているこの女性もしいま死んだらどうなるのだろうと、ふと思った。詳細は補遺にまとめた通りだが、その答えは鳥葬だった。秘境チベット＝鳥葬というイメージが強く、あるいは鳥葬はもうすたれてしまったのではないかと密かに心配していただけに、今なおほとんどが鳥葬であるという回答には、心から感動した。

鳥葬は、遺体をただ鳥につつかせるのではない。鳥葬師が遺体を解体し、脊髄や頭蓋骨までも粉々にして、すべてをハゲタカに食べてもらう。なるべく早く、輪廻の輪に入ることが来世の幸せにつ

ながるからである。なんと素直な来世観、世界観であろう。ただし、この回答を伝えた、漢族の連絡官はこの問題にはひどく神経質であった。なんの目的で調べるのか、執拗に問いただした。それは、これまでの外国人のほとんどが、これをスキャンダラスな奇習として扱ってきたこと、この葬風が過去にチベット人蔑視の格好の理由とされ続けてきたこと、などへの配慮からなのであろう。

3 ゴミ処理の作法

ところで、ラチュー村での撤収の話に戻ろう。もう一つ私の心にひっかかった光景がある。われわれは最後に土手の陰でゴミを燃やした。しかし、火を消した後からもゴミは出てきてしまう。それを余ったダンボール箱に入れ、最後にトラックの隅に載せるつもりだった。しかし、そのひと包みが不要物とわかると、ある村人はダンボール箱など利用できそうなものを自分のものにする、われわれがせっかく集めたゴミを付近にまき散らした。もともとこういう奥地の生活はきわめてシンプルであり、ゴミなどほとんど出ない。かりに出たとしても、そこらにまき散らしておけば家畜が食べるか、自然に分解していくものばかりである。だからその村人が行ったことは、通常なら問題をおこさない。しかし、われわれのゴミの中には多くのプラスチック梱包材の切れ端が含まれていた。それを遠くへと蹴散らしているのである。確かにそれは目の前から消えるという意味ではゴミ処理にはなる。しかしそれは強風にあおられて飛んでゆき、この村人が想像のしないほど長い時間、チベット高原のどこかで異物ゴミとして存在し続けてしまうのである。

それは別の光景につながる。92年の冬、私は、タイのチェンマイで開かれたシンポジウムに参加したのを機会に、ミャンマー国境近くのバイという小さな町と、バンコック郊外のマングローブ林を切り開いたエビの養殖池を訪れてみた。そこで世界中同じような光景が繰り広げられていることを確認した。つまり、今はかなり奥地に行っても川が荒れ、増水時の水線には延々とポリ袋やプラスチック容器がひっかかっており、都市近郊のマングローブ林の満潮線には遠目にも白くわかるほどプラクチック・シートの切れ端がひっかかって

いるのである。

そもそもゴミは必ずゴミ箱に捨てるものという習慣は、ひどく先進国的なものである。それは、放っておいては自然の循環に入ってはいかない素材のゴミを大量に発生してしまう生活様式を前提にしているからである。粗っぽく言えば、地球上に残されたヒマラヤ最奥部の生活と日本型巨大消費社会の間には、ゴミ極小社会→梱包ゴミ社会→大量ゴミ発生社会というスペクトラムが存在している。そしてこの最終に近い段階で、ゴミ処理は公共体が行うものという社会的了解が確立し、自治体が特別な車でゴミを集めるという先進国型の光景が出現する。そこでは、個人の生活とゴミの循環が切れ、ゴミ処理の過程が、市民と称する一般人の視野から覆い隠されるようになり、この構造によって大量消費型の都市生活が、物理的にも受容され、精神的にも免責されることになる。

発展途上国の巨大都市に出現しているスラム街は、ほとんどの場合、巨大ゴミ捨て場に隣接している。巨大ゴミ捨て場が出現するのは、先進国のようなゴミ処理のためのインフラ投資がほとんど行われないからであり、まさにそれが後進国であることのゆえんなのだが、機能的には単に村はずれのゴミ捨て場が大きくなったにすぎない場所にへばりつき、なおそのゴミの山に微々たる何物かを期待して生きようとする極貧層が、周囲に集まってくるからである。

先進国型の生活はどうみても sustainable なものではない。このどうしようもない事実を目をつぶり、そのような生活に一片の後ろめたさも感じず、なお sustainable な生活が可能であるかのように強弁する態度はもう時代錯誤でしかない。だが一方で、近代西欧型の生活様式の浸透力はほとんど抵抗不可能で、まず阻止はできない。梱包材としてのプラスチックの使用は、そのようなものの一部として、たちまちのうちに浸透していくのだが、ここに至って誰の目にも明らかになってきたのは、プラスチックのような簡単には自然のサイクルに組み込まれない類のものを製造し消費する人間とその社会は、これにみあった‘作法’を身につけていなくてはならない、ということである。本当は、あらゆる素材の使用に対して、それにみあった配慮が付随していたはずなのである。

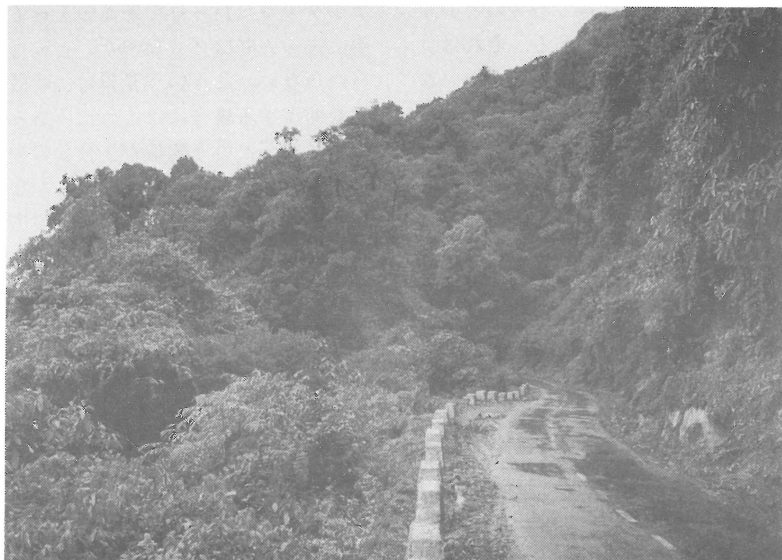
発展途上国の水系や街道沿いの空間が、プラスチック・ゴミだらけであることをみて、だから発展途上国の人間はダメなのだ、という批判は本当は当たらない。こういう光景は、腐敗しない素材を大量使用する場合にはこれにみあった作法と仕組みが必要だという認識が、社会の中で共有され構造化されてないことの反映でしかない。ここから一気に議論を地球環境問題にまで広げれば、地球環境問題が20年前の公害問題と異なる重要な点は、地球の規模に比して現代文明の資源・エネルギー消費が無視できない規模になってきたために、もっぱら人権の保証と経済活動という側面から構築されてきたと信じられている近代の諸制度一般を、資源・エネルギー消費を極小に近づけていくためという観点から洗い直しが始まった点にある、とも言えるのである。

4 地球環境問題と国家権力—実験国家としてのブータン—

しかし、そのような作法を社会の全構成員に守らせる方法をつきつめてゆくと、それは徹底した強権によるか、質の高い教育による理性的理解によるかの、二通りの道筋しかないように思われてくる。しかも、そのどちらの道もたどるにせよ、現代社会において個々人の消費水準を禁欲的レベルに抑えること自体が、たいへん達成困難なことのように見える。

しかし世界に一国だけ、国が国民の生活様式までも規定し、しかもそれに国民が従っている国がある。ブータンである。ブータンは、89年に勅令によって、男子はゴ、女子はキラという民族衣装を必ず着るよう決めてしまった。欧米系のニュース配信社は、これを個人の自由に対する中世的反動という文脈にたち、これに反発する南部ネパール系住民の反乱をとくに報道し、結果としてブータンの政情不安を強調しすぎてきた。しかし、むしろここで注目すべきは、国王自身がイギリスで教育を受け、中流以上の階級には近代教育を受けた人間が多くおり、ビデオが流行しているという点で、決して現代の先進工業文明を知らないわけではないのに、ブータン国民の多数が、国王の決定を尊重し、生活のスタイルまでも国家が規定する体制を受認していることの方である。

ブータンの森



さらに資源問題の面でいえば、いま深刻な危機にあるのは、有限と考えられている地下資源ではなく、森林や水産物など、再生可能といわれる天然資源の乱獲による枯渇である。森林でいえば、アフリカや中米の森林はもはや絶望的といわれる。東南アジアの熱帯林はもちろん、ヒマラヤ南山麓の森林ですら衰退が激しいといわれる。そのなかでブータンの森林は、群を抜いてよく保存されており、しかもそれが国王の意向を受けた国家による厳しい管理の結果である、という点は大いに注目してよい。

このような文字通りの sustainable な国家運営が可能であるためには、国王、ラマ教、老師、伝統に対する国民の圧倒的な帰依と、絶対的権力をもつ国王が有能なブレインをもっていなくてはならないはずである。この点に関しては、90年10月29日号の『ニューズウィーク』のインタビューで、ワンチュク国王はこう答えている。「ブータン人は、私を含めて、みな保守的とは言い難いし、勤勉でもない。楽しいこと、遊びやレジャーが大好きだ。急速な開発と伝統・文化のバランスをとりたいたいと思っている。ただし西欧のまねはしたくない」。

もちろん、ブータンはすでに、外側からの開

発・保存双方への国際的圧力、援助づけ、という問題に直面している。しかし、環境・資源管理・現代文明の反省、という観点からブータンを見直すという視点は、すでに20年以上も前に、桑原武夫氏が『世界の歴史 今日の世界』の中で言及していることでもある。現在の大量消費文明を禁欲的かつ生態学的に負荷の小さい文明に軟着陸させるためにも、実験国家ブータンの行く末は、人類文明の行く末にとってもたいへん貴重な存在であると言わなくてはならない。

補遺 鳥葬の現状—シガツェの場合—

鳥葬についての聞きとりは、登山隊本来の目的には入っていなかったため、当方が知りたい項目をまとめ、張・連絡官がシガツェ市担当部局に問い合わせる、という形をとった。各項目は、日本語→北京語→チベット語（回答はこの逆）の順で翻訳された。以下は、その応答の日本語部分である。また [] 内は後に、登山隊の高所協力員でチベット人のチミンから聞いた補足である。

①シガツェの人口はどれだけか。

答 シガツェ県(中国側の用語では区)は18郡を含むものであり、全人口は54万人。うちシガツ

エ市は郊外を含めて7万3千人。

②シガツェの死亡数は年どれだけか。

答 シガツェ県(区)の死亡率は千人当り6~7人であり、シガツェ市およびその近郊で年当り約490人の死亡となる。実際にもほぼこの数字に近い。

③死んだことの確認は誰が行うのか。

答 ラマ僧が確認する。[死後、3日間はラマ僧がお祈りを続ける]

④死亡はすべて鳥葬で葬るのか。

答 鳥葬はチベット族にとって最高の葬儀のあり方であり、普通は鳥葬で葬る。シガツェ郊外には鳥葬のための場所(鳥葬台)が3~4箇所ある。

⑤鳥葬にしない場合はどのような例か。その件数は。

答 シガツェでは鳥葬以外に、そのまま遺体を年楚河に流す水葬と土葬があるが、ともに数は少ない。親戚がない場合には水葬、土葬はたぶん漢族の習慣であろう。例外的に、名高いラマ僧(たとえばパンチェンラマ)は死んだら遺体を保存し、小さくなると陵塔に入れる。[鳥葬がうまくいかなかった場合も河に流し、なるべく早く魚に食べてもらう]

⑥鳥葬を行うのに許可・届出はいるのか。

答 申告はいらない。ラマ僧がよい日取りを決める。[日曜日以外で]

⑦鳥葬を行うための特別の役割の人間、もしくは職業があるのか。

答 特別の職業の人間がいる。日が昇る前に遺体を鳥葬台に運び、あとは鳥葬師にまかせ、ラマ僧は祈り続ける。[鳥葬師には、死者の着物、腕輪などを渡す。金のある家は、それ以外に寺に着物を一式奉納する。鳥葬代は、ラサで300元、シガツェで200元。金のない人は、物で払ってもよい。鳥葬師の生活はまあまあだが、社会的身分は低い]

⑧鳥葬についてしゃべることは、シガツェの人間の間でも、あまりしてはならないことなのか。

答 普通は鳥葬や死ぬことについてはしゃべらない。それは悲しいことであるから。

文献

Caroline Sargent: The forests of Bhutan, AMBIO, Vol.14, 1985, p.75-80

桑原武夫: むすびにかえて ブータンからの感想、『世界の歴史 24 今日の世界』(桑原武夫編)、河出書房、1970

Jigme Singye Wangchuk: Newsweek, 29 October 1990, p.60